

びくしけづりなどして、従者どもにいたるまで、身をきよめ、朝とくよりいで、まづ施薬院といへるかたに立より、まばしやすらひ衣冠著してまちける。やがて御附森川美濃守氏昌、松平伊勢守定朝よりあないありければ、すぐに立出て行ける。宣秋門の前にて、のりものよりおりぬ。美濃守、伊勢守同じく衣冠にて出むかひ御車よせのまへ清涼殿のかたを左にして、またひら唐門のうちにいり、諸大夫の間にいたりぬ。美濃守、伊勢守かたはらに侍り、むかひに非藏人ふたり、みどりの袖をつらねてざせり、やがて廣橋一位胤定卿、甘露寺前大納言國長卿いできたり給ひぬ。御使つとめらる。次第恐れあればこゝにゑるさず、それより美濃守、伊勢守あないにて、神嘉殿のわきより月華門の前を過、右掖門をいり、紫宸殿を拜し奉れば、みとの、さまよのつねならずゆほびかにつくりなして、御障子にはいにしへのひじり、又かしこき人々のかたちをあまたるがきたるは、住吉内記廣行の筆にして、威風凜々たり。略。節會の儀式此所にて行はる、よし、日花門のうち廻廊より左掖門を出て、御鳳輦を拜し、内侍所を左にして、廻廊之外承明門の前を過て、もとときしみちにかへりぬ。

〔内安録〕一八朔御進獻馬の目録、何毛にても月毛と書來りしを、御右筆頭久保吉右衛門、如前例月毛と認、堀田老中筑前守へ入見分たる時、筑州、是は今度の御進獻馬と毛附が相違せりと申されければ、あなた様何を御存じでと返答しければ、即座に久保吉右衛門は改易被仰付、向後は月毛と不認、全の毛附を認可申と仰渡されしは、故實を失ひ口をし、近頃御進獻は野馬になれど、毛附の復古はなし。

臣庶八朔

〔東都歳事記〕八月朔日、八朔御祝儀、五ツ時白帷子、貴賤佳節を祝す。今日を田實といひて、往古よては、わけて祝すべき日なり。天正十八年八月一日、台駕はじめて、江戸に入らせ給ふ、かくても、五度海昌平に歸し、萬民鼓腹して樂しむに、あらずや、神恩たれか、尊み祝し奉らざるべき公にも、五度の佳節より、わけて祝はせらるゝいとぞ聞えし。元祿の頃、清原長須といふ人の編輯の中に、江城八朔の白かたびらは、八月の節を白露といふによる歟といへり。○中略